

1. 景気動向

今回の調査によるD・I値（好転と回答した数から悪化と回答した数を引いた値）は、卸売業の「業況」だけが前回に比べてマイナスポイントが増加したものの、それ以外の業種では全てマイナスポイントは減少しており、徐々に回復基調の兆しが見られてきている。また、来期の見通しとして卸売業、サービス業で大幅な改善が見込めると予測している企業の割合が高く、商業関係を中心に景気回復が期待されるところである。

		建設業		製造業		卸売業		小売業		サービス業	
		4~6月	7~9月	4~6月	7~9月	4~6月	7~9月	4~6月	7~9月	4~6月	7~9月
		今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し
売上高		 19	 27	 34	 14	 9	 27	 23	 40	 14	 11
採算		 36	 40	 28	 25	 18	 10	 31	 29	 17	 17
資金繰り		 9	 24	 13	 11	 18	 9	 40	 40	 0	 7
業況		 32	 33	 29	 21	 30	 11	 38	 38	 17	 7
経営上の 当面する 問題点	1位	請負単価の低下・上昇難		需要の停滞		需要の停滞		需要の停滞		需要の停滞	
	2位	民間需要の停滞		製品(加工)単価の低下・上昇難		販売単価の低下・上昇難		購買力の他地域への流出		利用者ニーズの変化への対応	
	3位	官公需要の停滞		製品ニーズの変化への対応		大企業の進出による競争の激化		消費者ニーズの変化への対応		利用料金の低下・上昇難	
業種別 コメント		依然として業況は、D・I値がマイナスで推移しているが、前期に比べてそのマイナス値は20ポイント改善されており、季節的要因もあると思われるが順調に回復傾向になってきている。一方で、受注は増えているが請負単価の低下・上昇難等の問題により、「採算」と「業況」面でやや苦しい経営を強いられている。また、「材料仕入単価」の上昇が大きな問題となっており、今後もこの傾向はしばらく続くものと思われる。		前期に比べD・Iのマイナス値は、ほぼ横ばいで推移している。しかしながら、依然として業種間、企業間で差があり未だ不況からは完全に脱しきれていない状況が続いている。今回の特徴として、回答のあった65社のうち17社が工場建物、生産設備を今期投資する等、来期以降に向けて明るい材料も増えてきている。経営を取り巻く問題点として、今回新たに「製品ニーズの変化への対応」が上位にあげられており、各企業の技術力が問われていると言える。全体としては、急激に景況が悪化するとは考えられないが、厳しい状況に変わりはないと思われる。		前期に比べ売上高、採算、資金繰りに改善が見られた。特に採算では大幅な改善が見られ、来期への見通しを全体的に明るくしている大きな原因となっている。その一方で業況は悪化しており、前述の改善傾向とあわせて考えるならば、勝ち組、負け組といった企業の二極化が、よりはっきりしてきたように思われる。また来期への見通しは全体的に改善傾向であり、全国的にも景気回復の兆しが見え始めている。地方では依然として厳しい業況は続くものと思われるが、時代にあったビジネスモデルの再構築など経営努力がめぐる所まで景気が回復しつつあるようである。		今期は新入学シーズンに伴う物品購入等の季節的な要因で個人消費が伸びたこともあり、売り上げ、採算、業況とも大幅な改善が見られたが、資金繰りについては依然厳しい状況が続いている。また、来期の見通しでは、中元商戦を前にも個人消費の購買意欲が今ひとつ伸び悩みの感じがあり、厳しい見方が強く残っている。大型店等への消費購買力の流出対策も必要だが、消費者ニーズにあった店づくり、品揃えの取り組みが今後の課題と思われる。		歓送迎会やGWなどによる利用者の増加から、全体的に大幅な改善が見られ、資金繰りについては、4年3ヵ月ぶりにD・I値がマイナスを脱却し改善している。今後は、原油価格の高騰による需要の停滞が懸念されるが、夏休みのレジャーやお盆などの帰省に向けて利用者の増加への期待感から、全体的に改善の方向にある。利用者に対するサービスの向上に向けた努力が必要と思われる。	

*表中の天気図はD・Iを以下のように分類したものです。

				
とくに好調 (50 DI)	好調 (25 DI<50)	まあまあ (0 DI<25)	不振 (25 DI<0)	きわめて不振 (DI<25)

当所では分析にあたってD・I（好転したとする企業割合から悪化したとする企業割合を差し引いた値）を採用しました。